

## 『今様八犬傳』(三) — 解題と翻刻 —

高木 一元

## 【解題】

前号に引き続き正本写『今様八犬傳』の五編と六編とを紹介する。巻末に続刊として犬村大角「赤岩住処の段」の予告が見られるもの、おそらく七編以後は刊行されずに終わったものと思われる。伝存が確認できないのと、合冊された後印本も六編で終わっているからである。

さて、五編上巻「古那屋の段」では、房八と沼蘭の犠牲死に拠って犬塚信乃が救われ、彼等の息子である犬江親兵衛が犬士の一人である事が判明する。犬士達が里見家との因縁を知る重要な場面である。原作が古那屋の一室に於いて事件が進行するという、歌舞伎舞台を意識して書かれた場面であるせいも、大きな改変は施されていない。

一方、五編下巻以降は原作の「対牛楼の段」に相当し、凄惨な敵討の場であるが「石浜の段」と変更され、遊里の人々や、小文吾の季の妹として新たに花紫太夫を登場させ

るなど、全体的に華やかな雰囲気になっている。鷗尻並四郎と妻琴(船虫)、身をやつした里見義成とその許嫁としてあづまや四阿等、原作中の人物に新たに設定した人物を絡めた複雑な趣向立である。そもそも、初編の冒頭で描かれた如く、毛野の父である粟飯原首を讒言で陥れ殺害させ、千葉家の重宝である嵐山の尺八を奪った馬加大記は、首の妻稲城と一子夢の助を殺害。籠山頼連は毛野の母親で首の愛妾であった調布を殺害し、粟飯原家の重宝である落葉丸を奪ったのであった。

つまり、本作は犬坂毛野を軸にした千葉家の御家騒動として八犬伝を再構成したものである。歌舞伎とは距離を措いた江戸読本の代表作を、無理なく歌舞伎風に再構成した二代目春水の手並みは実に巧妙だと言い得よう。

なお、五編下巻の13丁と14丁とが錯簡しているが、筋は通っているのでそのまま翻刻した。

【書誌】

五編

編成 中本 四卷上下二冊 十七・七種×十一・六種

表紙 錦絵風摺付表紙「今様八犬傳」第五編「上」(下)

冊「爲永春水作」「歌川國芳画」〔錦耕堂合版〕

見返 (上冊)「今様八犬傳第五編上巻」「爲なかしゆん

すゐさく」「一勇さいくによしゑ」「錦耕堂「板」

「とり女画」\ (下冊)「今様八犬傳第五編下の巻」

「春水作」「國芳画」「葛吉山口版」「とり女画」

序末 「嘉永壬子彌生望 爲永春水誌「印」

改印 「米原」「渡邊」(一才・十一才)、「子貳」(一才)

柱刻 「八犬傳五編(一〜二十七)」

匡郭 単辺無界(十五・三×十・四種)

刊末 「國芳画」「春水作」(十ウ)\「爲永春水作」「一

勇齋國芳画」(二十ウ)

諸本 慶應義塾図書館(202508-12)・東京大学総合

図書館(24-1019)・館山市立博物館・専修大向

井・架蔵／(改題後印本) 架蔵

備考 改題後印本「里見八犬伝」は五六編を合冊した

一冊で、表紙に「外題 國明画」、見返「里見八犬伝」

六編

編成 中本 四卷上下二冊 十七・八種×十一・八種

表紙 錦絵風摺付表紙「今様八犬傳」六編上(下)」

「爲永春水作」「一勇齋國芳画」「錦耕堂梓」

見返 (上冊)「今様八犬傳」「六編上冊」「爲永春水作」

「一勇齋國芳画」〔山藤合梓〕「おとり画」\ (下冊)

「今様八犬傳」「六編下の巻」「爲永さく」「一勇

齋多かく」「紅英錦耕画梓」「おとり画」

序末 「嘉永六癸丑春新販 爲永春水誌「印」

改印 「村松」「福」「子十」(一才、十一才)

柱刻 「今様八犬傳六(一〜二十)」

匡郭 単辺無界(十五・四×十・五種)

刊末 「國芳画」「春水作」(十ウ)\「爲永春水作」「一

勇齋國芳画」(二十ウ)

諸本 慶應義塾図書館(202508-12)・館山市立博物

館・専修大向井／(改題後印本) 架蔵

【凡例】

仮名遣いや清濁などは原文通りとしたが、読み易さを考  
慮して以下の諸点に手を加えた。

・序文以外の本文には、漢字を宛てて私意的解釈を示  
し、原文は振仮名として残した。

- ・原文の漢字に振仮名が施されている場合は、（ ）で括って示した。
- ・原文の漢字直後に割り書きで訓みが示されている箇所はそのままとした。
- ・本来「ハ（バ）」は平仮名であるが、助詞だけは「ハ（び）」のままとした。
- ・原文には一切使用されていない句読点を補った。
- ・「なに、」を「何〔に〕」の如く原文にない文字は「〔 〕」で括った。
- ・本文中の飛び印（▲▲や■など）は省略した。
- ・全丁の挿絵を掲げ、本文と参照するために丁数を示した。
- ・底本として慶應義塾図書館蔵本を使用させて頂いた。

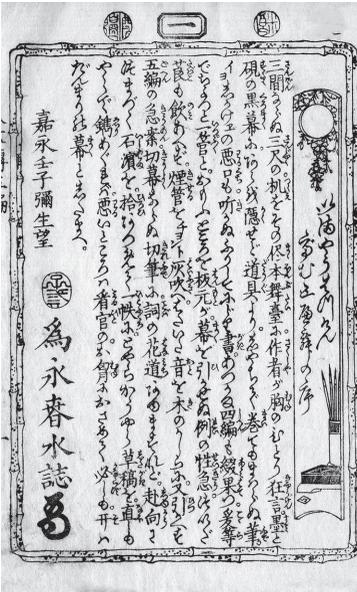
【謝辞】

本稿はJSPS科研費25370207の助成を受けたものです。

五編表紙



見返



序

〔見返〕  
 今様八犬傳／第五編上巻／錦耕堂「板」／爲なかしゆん／  
 すゐさく／一勇さい／くによしゑ／とり女画

〔序〕  
 〔米原〕〔渡邊〕

いまやうはつけん／でむ五へむの序  
 三間ならぬ三尺の。机をその俣本舞臺に。作者が胸のひ  
 とり狂言。墨と硯の黒幕に。あらを隠せど道具より。しや  
 ちで巻てもまはらぬ筆。イシかけエの悪口も。听かぬふり  
 してにじり書。あつかま四編も綴果つ。爰等でちよつと  
 一管と。おもふところを板元が。幕を引かせぬ例の性急。  
 ついだ眞も飲あへず。煙管をチント灰吹へ。はたいた音を  
 木のかしらに。又引かへす五編の急案。切幕ならぬ切筆  
 に。詞の花道あゆますれど。赴向につまづく石濱を。拾  
 あつめて一帙に。とやらかうやら草稿を。直しもやらで鉤  
 あぐれば。悪いところハ看官の。お智におさめて必しも。  
 開ハだんまりの幕としたまへ。

嘉永壬子彌生望 「字式」 爲永春水誌 「印」

1+

1才

口絵第一圖  
三出  
犬坂毛野胤智



1ウ

口絵第二圖  
工藤祐經実ハ籠山勘ケ由左衛門  
大磯の虎実ハ再出  
花紫



2ウ

「今様八犬傳」(三) — 解題と翻刻 —

2オ

神崎の江口実ハ白拍子妻琴

3オ



4オ

3ウ

〔本文〕

四へんのつゞき 手負ひながらに房八が、真心明す長物語。  
 熟々聞いて小文吾ハ、打驚きつ、進寄り、勦りながら「房  
 八殿 思掛けなき御身の素性。命を捨て主筋なる犬塚氏  
 に、代らんとハ適 忠義の心延へ。御身の生命を捨てたる  
 ハ、只身代りの為のみならず。最前奥に逗留せし念玉ねたまと  
 といへる山伏「およそ破傷風の妙薬にハ、若き男女の血潮  
 を取りて、年経りたる椀尾貝に入れ、是を吞する其時ハ、  
 立地に本復す」ト問はず語りに言ひつるが、今こそ揃ふ男  
 女の生血。然すれバお沼蘭も犬死ならず。トハ言へ、惜ら  
 若者を、親子三人ン同じ日に、同じ所で死なすとハ、惜む  
 べく又恨むべし」ト言ふに、房八莞尔と笑ひ「扱ハ夫婦が  
 血潮にて、主人に等しき犬塚様の、薬に成らバ今際の喜  
 び。死して甲斐ある夫婦が血潮、早く御役に立ててよ」ト  
 言ふに、小文吾点頭きて涙飲込み身を起こし、彼念玉が  
 置忘れし椀尾貝を手に取りて、倒れしお沼蘭を引起せバ、  
 「苦」と一声叫ぶと等しく、さつと血潮の漬る。其傷口へ  
 椀尾貝を当れバ、滴る唐紅、見るに目もくれ心さへ、弱  
 るばかりに小文吾ハ、口に唱名目に涙、お沼蘭ハ細き目  
 を見開き「兄さん、夫ハ未だ生てか。心の信実打明けて、  
 言はれし事を夢かとばかり、聞くに嬉しく疑ひも、怨みも晴  
 れて諸共に、消へてゆく身ハ惜からねど、惜き名残に



5オ

4ウ

次〔つゞき〕今一丁目ト言ふに、房八躰寄り「扱ハお沼蘭ハ現にも、我本心を聞しとか。思掛けなき過失にて、其方ばかりか大八まで、我手に掛けしも宿世の約束。此世の縁ハ薄くとも、未来ハ必ず変らぬ夫婦」其お言葉が彼世へ土産、とハ言へ、せめて大八が死顔なりと今一度「イヤ〜見るハ迷ひの種、只此上ハ小文吾殿、我身の血潮疾く〜」と言ひつ、刃を取直し、弓手の腹へ突立てバ「アレマア些時待て給も」ト門の戸推開け駆入る妙真、我にもあらで、房八とお沼蘭が間に身を投伏し、涙ながらに「なう房八、兼ての覚悟と言ひながら、嫁さへ孫さへ諸共に、返らぬ途に旅立たせ、此身一つを何とせう。お沼蘭ハ訳を知りながら、告げぬ我身を怨みもせんが、斯う成る事と知るならば、何しに其方を送らうぞ。許して給も」ト言掛けて、又漕々と打泣けバ、房八ハ目を見開いて、「母様、嘆きハお道理ながら、余りくよく〜思ひ過ぎ、患うて等下るな、便り少なき母の身の上、此先憑むハ大田殿、早此上ハ、我血潮を片時も早く犬塚様の御役に立〜」ト覚悟の有様、小文吾「今ハ是迄」と房八が傷口へ、又彼貝を推当〜、漬る血を受入れつ、一間に伏したる犬塚の、口へ血潮を流込むにぞ、信乃ハ一声「苦」と叫びて、其俣息の絶るにぞ、小文吾も又妙真も「此ハ」とばかり驚く折しも、庭の小陰に立忍びて、様子伺ふ辛四郎が、障子



6オ

5ウ

蹴放し飛んで入り「お尋ね者(の)犬塚信乃、村長殿へ引いて行く」ト言ひつ、信乃を引立つれば、信乃ハ忽地息吹返し、襟髪取て投出せば、投られながらも、辛四郎が猶組付かんと起上るを、起しも立ず犬塚(が)、膝に楚と押敷いたる此有様に、小文吾等ハ再び驚き、声振立て「思掛け無き其活躍。本復ありしか、犬塚氏」ト言はれて信乃ハ心付き

次「ワオ」つゞき「扱ハ血潮の奇特にて、死ぬべき命の忽地に助かりたるか。忝や。是も偏に山林が古主へ尽す忠義の真心、九ツの世を換るとも、此厚恩ハ忘るまじ。斯迄妙ある血潮の奇特、彼大八にも与へなバ、もし蘇生る事もやあらん。試み給へ、犬田氏ト言ふに、小文吾点頭て、彼校尾貝に残りたる血潮を、其俣大八が口を開きて注入るれば、不思議や死したる大八が忽地すづくと立上り、生れて四才に成る迄も、握りし俣に開かざりし左りの拳を開くにぞ、内より一つの玉の出るを、辛四郎ハ咄と見て「其玉、俺がト一言ひながら、信乃を振捨て大八に、飛で掛るを身を交はし、小手を捉へて捻拳ぐる。童に似気なき力量早業。「こりや敵はぬ)、辛四郎が逃んとするを大八か、側にありあふ小文吾が脇差手早く拾取り、抜く手も見せず辛四郎が細首丁と討落せば、此有様に小文吾等ハ驚愕つ、また歓喜つ。大八が拳の内より出でたる玉を熟々見るに、此にハ仁じんの一字あり。夫のみならず、父房八に最前蹴

られし脇腹に、何時の程にか 二の巻 ウツ 一のまきより 痣の出来て、形容牡丹の花に似たるが、八ツ口の間に見ゆるに、人々感嘆したる。夫が中にも房八ハ、苦痛を忘れて声奮立て「扱ハ我子ハ蘇生り、殊に玉あり痣あれバ、誰か犬士しと云はざるべき。親にハ遙かに勝りたる。適良き子を産みしよな」ト言はれてお沼蘭ハ莞尔と笑ふを、此世の暇にて、果無く息ハ絶へにけり。折しも一間に声あつて「里見治部の大輔義実の家来、金碗きんわん大助孝徳入道、大だだい、同藩の武士ぶし蛭崎十一郎照文が見参せん」ト呼はりつ、障子をさつと推開レバ思掛け無き、山伏の彼念玉と観徳が、初めに変る此出立に「此ハ」と驚愕おどろく其中にも、信乃小文吾ハ脇差を身に引付けて油断せず「様子如何に」と躊躇ちゆうちゆふ程に、大ハ座中を倍と見回し「人々怪しむ事勿れ。我ハ年来、仁義にぎぎ礼智れいち忠信ちゆうしん孝悌かうていの八ツの文字顯れたる八ツの玉を言ねんとて、六十余州を遍歴すれども、未だ一つの玉をも得ず。今年ハ東国に杖を曳て鎌倉迄来りしに、因らずも此処に居らる、蛭崎照文に邂逅こうごうひ、子細を問バ、照文ハ「君の仰せを承はり、賢良けんりやう武勇ぶゆうの人を選び召抱へん為、国々を窃に繞る」と言ふ。時に「此なる行徳に、小文吾と言ふ若者ありて武勇勝れし者なるが、腰のあたりに一つの痣あり。其形容牡丹に」つぎへつゞき 似たり」と風聞ふうもん仄に聞えたり。其痣牡丹に似た

『今様八犬傳』(三) — 解題と翻刻 —

る事、思ひ合する事もあれバ、暗に様子を探らん為、我ハ念玉と仮に名告、照文ハ又観徳と偽名付けて、当所に来り「山伏なり」と言ひ拵へて、共に此屋に逗留なし、始終の様子を窺ふところ、「二人小文吾のみならず、信乃現八も大八も、又額藏とか言へる者も、各々其身に痣在りて、各々又其玉を持ち」と察知つたる此身の喜び。抑主君里見殿、先年安西景連に城を囲れ給ひし時、城に兵糧乏しけれバ、味方難儀に及し折柄、戦術尽きて、我君八房と言ふ飼犬に「汝、敵將景連を喰殺して、多くの味方の生命を救ふものなら、我娘伏姫の婿にせん」との御戲言を、犬ハ信実と思ひけん。其夜景連が首級捕つて帰りたるより、彼犬ハ伏姫上に恋慕して、此時も 次 ウツ つぎ 姫の側辺を離れず、竟に富山に伴はれて、長き月日を送り給へど、姫君賢女けんじゆに在セバ更に御身を汚され給はず。然ども犬の氣を受けて腹に御子を宿し給ふを、世に恥しく思召れ、自殺し給ふ。疵口より忽地白氣びやくきは立ち上りて、八ツの玉を巻上げたり。其時我ハ鉄炮にて彼八房を打留めしかども、姫上自殺し給ふを見て、共に追腹切らんとせしが、姫君の仰せ重ければ、惜からぬ身を延命へて、彼飛失せし八ツの玉を、年来尋求めん為、諸国を遍歴し、当所に今日只今其玉の主に逢ふたる歡喜ハ、何に喩へん物も無し」ト言ひつ、傍を見返れば、照文も又小膝を進め



6ウ

7オ

「今此法師の言はる、如く、犬塚はじめ五犬士ハ共に里見に宿世あれバ、今より当家の臣たらん事、夫ハ勿論の事なるべし。我君安房を切随へ、一国無異に治れども、先年安房を逐電做したる山下定包、麻呂信時、窃に逆意を催して里見を討たんと謀る由。然るに安房ハ辺鄙なる故味方に左程智勇の者無し。扱つて拙者に仰付けられ、普く賢を求むる折柄、凶ずも御身等に邂逅ふたる歡喜ハ、百万騎の味方を得しにも増して、当家の僥倖ならん」ト言ふに、大ハ懐中より彼水晶の数珠を取出し「汝等、先づよく此を見よ。忝くも此数珠ハ つぎ つぎ つぎ 役行者の姫上に授け給ひし処にして、汝等が所持なす玉ハ皆此数珠の親玉なり。又身内なる牡丹の痣ハ彼八房が毛色にあやかる。此も遁れぬ因果なり」ト言ひつ、差出す彼数珠を、信乃小文吾ハ倍と見て、儀容を改め、手を支へ「此身の素性を聞くのみか、又我々が身に就きし玉の因縁、痣の由来、承りし身の本懐、此にて思廻らせバ我々五人の其他に猶三犬士在らん事疑ふべくも候はず。今より諸国を馳巡り其三犬士を尋求め、里見の御家に御味方做し、山下麻呂をも討伐げん。御心安かれ御両所」ト言ふに、喜ぶ、大照文、夫と聞くより房八も、苦しき息を付きあへず「ヲ、勇ましき其一言、我にハ少しの痣も無く、玉も無けれど僥倖に、犬士の員数に入りたる大ハ。

8才



7ウ

何卒彼が身の上を、宜敷憑み参らする」と言ふに、大  
 点頭て「信乃が病を救はん為、我家に先祖より伝はる所の  
 血潮の名法ほう、夫とハ無しに小文吾に、最前話し聞せしか  
 ども、世にも得難き男女の血潮、如何にやすると思ひし  
 に、汝夫婦が生命を落し、信乃を助けし義心ぎんに拠つて、  
 忽地其子も蘇生り、犬士の員数に入りたるハ、信義を照す  
 天の恵み。今よりしてハ大八が名を犬江親兵衛仁と名告  
 せ、親の名迄も顕彰せん」と言ふに、房八莞尔と笑ひ「其  
 御言葉が未来へ土産。誘此上ハ犬田殿、我首討て親人の  
 縄目を早く救はれよ」ト覚悟の牀に、小文吾が「苦痛を見  
 せじ」ト立寄て、口に唱ふる称名と共に閃く刃の下に、房  
 八が首討落せば、堪へかねつ、妙真が、覚へず「日」と泣  
 沈む声と等しく表にも「苦」ト叫びて、苦しむ物音。「何事  
 やらん」ト小文吾が門の戸開くれバ、現八が孟六均太を  
 小脇に締付け、徐々として入来たり、二人りを傍に投出せ  
 バ、孟六均太ハ眼玉飛出で伏重なりて息絶へぬ。其時現八  
 威儀を改め「拙者事ハ今朝早く破傷風の妙薬を求めん為  
 に、芝浦迄遙々尋ねて参りし所、其妙薬を製する人、今  
 ハ彼地に居らず」と言ふに、力及ばず、すごくと立帰  
 りつ、門迄来しに、内にハ人の嘆く声、「何事やらん」と  
 打騒ぐ胸を鎮めて覗ふ程に、残らず漏聞き此彼の御物語  
 に、此身の上さへ、玉と痣との因縁さへ、初めて知つて



9 オ

8 ウ

疑惑の雲ハ [つき] [つぎ] 忽地晴たれば、「此上ハ内に  
 入り、各々方に見へん」と思ふ折柄、側なる壁を崩して  
 這出す癖者、何かひそく囁合ひ、行んとするを引補へ、  
 則ち此処に」と物語れば、照文聞いて打点頭「其癖者を捕  
 へずバ、此方の大事を訴へられ、事の難儀になるべきを、  
 捕へられしハ速候手柄。此上ハ犬田氏御身ハ疾く其首級を  
 村長方へ携行き、親御の繩目を救はれよ。我ハ法師と諸共  
 に犬塚犬飼大江を伴ひ、一先此場を立退ひて、麻呂山下を  
 討滅す手立を繞らし、且ハ亦、彼額藏にも対面做し、猶  
 此他なる三犬士の在処も、暗に訊ぬべし。御身も後より  
 合点か」ト言ふに、小文吾莞尔と笑ひ、「御氣遣ひ做さる、  
 な。親の難儀を救出し、出口くくの固めを退け、やがて後  
 より追付かん」と言ふに、大八立上り、壁に掛けたる弓  
 推取り「婆様、吾ハ今日から武士。伯父様達と一緒に行く。  
 婆様も後から御座んせや」ト勇立つたる孫の顔見る嬉さと、  
 房八が首級に別る、悲しさに、亦伏沈む妙真が心を「然こ  
 そ」と察したる、大照文。信乃現八も [つき] [つぎ] 共  
 に目と目を見合せつ、「さらバ」とばかり立上られバ、早  
 啼渡る群鳥。夜ハほのく」とそ明にける。  
 ○是より下の巻に続く

國芳画 / 春水作

107



10才

9ウ

東都書房 南傳馬町千目 萬屋吉藏板		狂句五百題 全三冊 五代月川柳著	畸人百人一首全冊 同全	奇持百歌仙 同断 全 一立齋廣重圖	天録太平記 初巻 全 一勇齋國芳作	田舎織糸線袂衣 四編 同全 画作	遊仙春雨州紙 土編 一陽齋豊國画	國芳画 春水作
-------------------------	--	------------------------	----------------	----------------------------	----------------------------	---------------------------	------------------------	------------

奥目錄

10ウ

〔広告〕

藏版新刊珍奇雜書略目録

- |         |      |        |        |
|---------|------|--------|--------|
| 遊仙香春雨艸紙 | 十二編  | 一編     | 緑亭川柳作  |
| 田舎織糸練袂衣 | 五編   | 同全     | 陽齋豊國画  |
| 天録太平記   | 追々出版 | 同全     | 画作     |
| 奇特百歌仙   | 同断   | 同全     | 一勇齋國芳画 |
| 畸人百人一首  | 全二冊  | 同全     | 一立齋廣重圖 |
| 狂句五百題   | 全二冊  | 同全     | 畫案     |
|         |      | 五代目川柳著 |        |

東都書房

南傳馬町二丁目

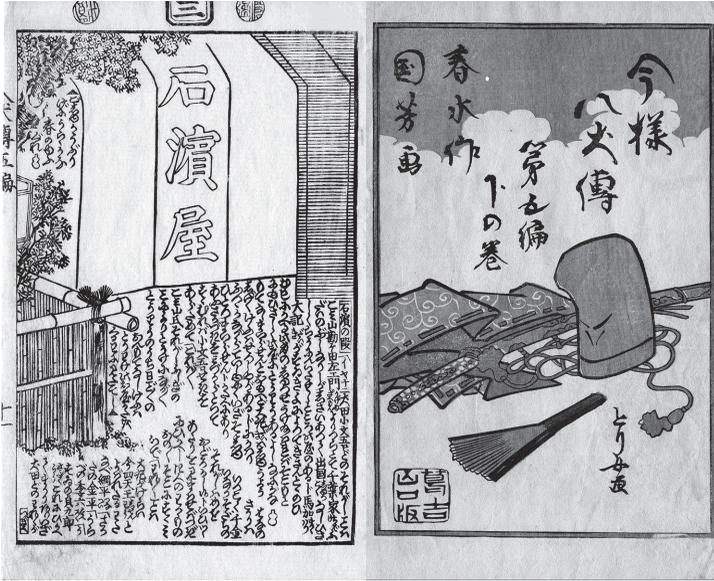
葛屋吉蔵板

奥目録

後ろ表紙



11オ



見返

下巻見返

「今様八犬傳第五編下の巻」「春水作国芳画」とりひき  
 「葛吉」山口版

石濱の段 「イヤナニ犬田小文吾殿 某事ハ籠山勘ヶ由左エ門さへん頼連とて千葉家げちば譜代の武士なりしが、仔細について出国くしつ做し、久敷く浪人致せしところ、此屋の主人馬加はり大記が推挙に抛て婦參整ひ、往古に返る此身のしゆつせ 承れば其処許にも久敷く此屋に逗留ある由、何がな饗応し參らせんと思へど、大記きハ主用繁く今日ハ拙者が主人に代り、不束ながら亭主役、誘粗酒ひとつ參せん」ト側に在りあふ壺を自ら取つて勧めば、小文吾席を改めて「是ハ籠山氏、某不思議の事に抛り、当家になかくとらう、長々逗留のうち、日毎の御歡待、今日ハ取分け此御屋形を花街に見立し御趣向振。実に麗かな春の夕暮、花の盛りハ一刻千金、田舎育ちの某ハ目を驚し候」ト言ひつ、四下を見回せば、次に控へし四人の若者各々其処に進出で「我々事ハ大記が家来、今四天王とと呼ばれたる渡辺綱平」坂田金平「卜部季六」碓井貞九郎とて是に控へて罷り在り。誘犬田殿我々が「つぎ」御酌致すで御座りませう」ト言ふを頼連聞あへず「ヤ汝等が骨太な無骨な酌でハ酒ハ呑めぬ。其処を思つて今宵の催事、花街の女子も来て居る筈、疾く此処へ呼出しやれ」ト言ふに、

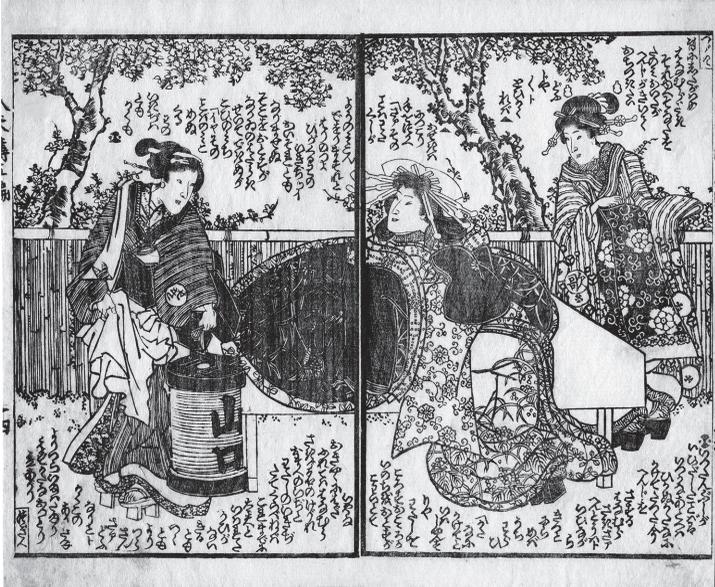


12 オ

11 ウ

綱平額を撫で「如何様、是ハ仰せの通り、頼連公（頼連公）にハ兼てより御執心の花紫（花紫）をらト言ふを、頼連見返りて「綱平何を申すのじや、小文吾殿（小文吾殿）の」聞かる、前で、余りつか／＼遠慮の無い」ト言ふに、小文吾打笑みて「イヤ拙者への事ならバ、御斟酌ハ御無用」。恋ハ思案の外とか言へバ、頼連殿にも、扱ハ其「如何にも知られし上からハ、包むに詮無き我が思ひ、今宵ハ是非共花紫を、口説き落して聞の花ト言葉半ばへ向ふより「さア」皆さん御座んせ」ト仲居の阿石が先に立ち、廊下伝ひに花紫が新造、禿引連れて、襦袢姿しどけなく、歩出でつ、立留まり「浮世の春ハ押並べて、曲輪も変らぬ此眺め、思はぬ風に誘はれて、色香を運ぶ艶桜、手生けの花と手折れでも水挙げかねし心の内、本に辛気な事じやな」ト言ふを此方に綱平季六「是ハく紫太夫、頼連侯の御待兼ね。さアく此方へ」ト差し招けバ「でも忙しない。行くわいなア。子供来やれ」ト言ひつ、も皆打連れて座に通れバ衣紋繕（衣紋繕）ひ頼連ハ四下を見回し「コレ阿石、此程よりして某が、色々手を変へ品を変へ、口説てもく（口説てもく）」ト（ト）身（身）に（に）従（に）は（に）ぬ花紫、それ故其方を憑み措いたが、返事が聞いて落着きたい。如何じやく」ト問掛くれバ、阿石ハ莞尔手を支へ「さア其事ハ、妾が良う呑込んで居りますれ」と、張の強ひが花廓の意気地、「ツイおいそれとも成りませぬ」其処

14  
オ



12  
ウ

を落すが、仲居の働き「急いで出来ぬが恋の道」「イヤ其  
 言葉呑込めぬ。花廓の意気地ハ兎も角も、一旦武士が言出  
 した言葉は、如何な後へハ引かぬ。刀に懸けて、只今、  
 返事をさす。花紫 サア返答ハ」ト言ひながら、佶と  
 睨めバ、打笑ひ、「刀に懸けてと言はしやんすりや、妾を  
 殺す御心か。命を落すが怖いとて、嫌な御客に肌触れて  
 ハ花紫が名の汚れ、御前の意地と妾の意気地、立て競べね  
 バ是迄に大夫と言はれた甲斐が無い。斬るとも突くとも  
 頼連さん。さア如何なり」とト覚期の有様。頼連今ハ堪り  
 得ず、刀推取り立上り「つぎへ」<sup>12ウ</sup>「つぎ」<sup>14オ</sup>「ヲ、良ひ覚期だ。  
 此上ハ小文吾殿への欲待に、汝を此場で活作り。我包丁  
 の手並を見よ」ト刃をひらりと抜放し、「只一討ち」と振上  
 ぐるを、「アレマア待て」ト新造仲居止むるを、突退け振払  
 ひ、猶も「斬らん」と頼連が、振閃かす刃の稲妻。折し  
 も彼方の一間より、走出で来る舞子の朝開野あき、二人が中  
 へ割て入り「まア、待て下さりませ。訳も白刃の其中へ、  
 飛んで入るハ何とやら、出過ぎた者と御叱りも、知つてハ  
 居れど此佷に、見捨て措かれぬ此場の様子。乙に纏れて  
 御座敷も、波風立てぬが舞子の役、憚り乍ら」妾に、此  
 場の事ハ此佷に、御預けなされて、頼連様、其御刀をも  
 御怒りをも御取めなされて下さりませ」ト言ふを頼連聞敢  
 へず「誰かと思へバ其方や朝開野。要らざる女の差出口。



13 オ

14 ウ

止立て為ずと、其処退きやれ」「イエ滅多にハ退きますま  
 い。凡そ殿御も姫御前も、恋に変わりハ無いものを、此程か  
 ばらして妾が、心の実情打明けても、貴方ハ薄情い御返事  
 計り。貴方が妾に薄情いも、此処に御座んす紫さんが、  
 貴方に薄情く為しやんすも、心に変わりハ御座んせぬ。恋  
 の敵と知りながら、紫さんを庇ふのも、貴方へ尽す妾の  
 真実。此場を預けて下さんすか。其も適はぬ事ならバ、  
 紫さんより妾から先へ殺して下さんせト、身を擦寄す  
 れバ、頼連が「つぎ」<sup>14ウ</sup>「つぎ」<sup>14ウ</sup>「心に染まぬ朝開野か扱  
 ひながら、此仮に惜ら盛りを見も果ず、散すハ惜しき  
 花紫。然らバ其方が望みに任せ、此時の間預けて呉れ  
 う。とハ言へ、抜いた此白刃、血を見ぬ内に収めて、八  
 刃の手前、武士の一分「立」たぬとならバ朝開野が、貴方  
 へ立てる小指の心中。是受取つて」ト言ひながら、頼連が  
 刃にて指を切らんとするところを、背後に覗ふ小文吾が  
 「待つた」ト声掛け立寄つて、刃をもぎ取り、我と我小指  
 を発止と切落とせば、不思議や俄頃に動揺して、風も有ら  
 ぬに散掛る桜の梢を屹度睨まへ「はて心得ぬ。小文吾が今  
 此白刃に血を彩せば、忽地桜の落花わく做すハ、伝へ聞  
 「き」たる落葉丸おほ」ト言ふに「扱ハ」ト朝開野が寄らんと  
 するを、頼連が手早く刃を受取つて「血を見し上ハ此白刃  
 ハ拙者が慥に受取つた」ト鞘取上げて収れば、忽地散止む



15 オ

13 ウ

桜の不思議。其時犬田ハ切捨てし指を取上げ「コレ朝開野、此小文吾が其方へ心中、是受取つて」下差出せバ「妾へ御前が心中とハ」「ハテ知れた事。惚れたのじや。其方と吾ハ宿世より結んだ契の在るやらん。一目見しより恋風の身に染み、と思込み、忘る、暇無き煩惱の、犬田が心を推量して、色良い返事を聞かつぎ 1315オ 1315ウ 1315キ せて呉れ。如何じや〜」ト手を取つて戯むれ掛るを朝開野が「悪い事をト言ひながら、其手を取つて拗返す力に驚く小文吾が「扱こそ違はぬ、儲に男」「ナニ男とハ」ト頼連が聞答むれば、小文吾が「イヤニ男が此様に言葉に盡し、誓文に指迄切つたを徒にハ為まひ。其返答ハ何とじや」ト言はれて、朝開野莞尔と笑ひ頭髮に挿したる釵児を抜取りて差出し「御前に返事ハ此釵児」「すりや其品を某に」ト言ひつゝ、取つて打眺め「こりや桃花を彫りたる釵児。是を身共へ返事とハ」「さア其花の釵児の謎が解けたら後方迄に」「互ひの胸をも下紐をも、とくと思案をして見やう」ト彼釵児を懐中へ入るれば、此方に頼連が「扱ハ小文吾と殿にハ此朝開野を執心とな。心ハ同じ某も花紫の香に愛でて、所縁の色忘れねど、急いで行かぬが恋の道。此上ハ、これ朝開野、其方が言葉に従ふて、些時の間、花紫ハ其方に預けて遣はす程に、口説き落して今宵の内に、屹度身共に取持ち致せ。犬田氏にハ別間にて薄茶の衣服参せ



16 オ

15 ウ

ん。皆も一緒に斯うおじやれ」ト言ひつゝ、立てバ、小文吾はじめ新造歌綾、仲居の阿石、綱平、金平、季六等も皆打連れて奥へ入る。跡見送りて花紫ハ進み寄りつ、「朝開野さん、妾や御前に願ひがあるが、何と適へて下さんすか」ト言ふに、朝開野差し寄つて「然う言はしやんすりや、妾も又御前に一つの願ひがある。其間届けて下さんすか」「御前の事なら何なりと。縦命に替へてでも」「嬉しう御座んす、大夫さん。して又御前の願ひとハ」「恥かしながら、朝開野さん。情夫に成つて下さんせ」「夫なら女子の此妾に」「縦女子であらうとも、惚れまいものでも」

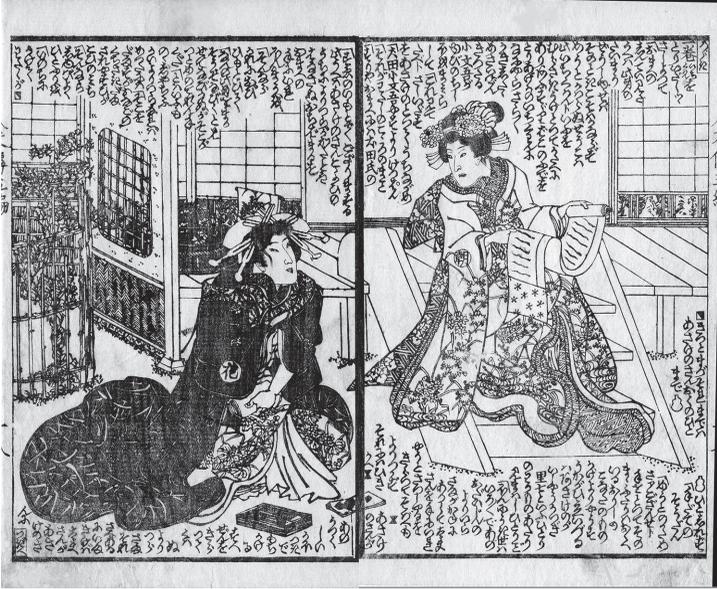
つぎ、朝開野打案じて「女子が惚れるも、是も何かの約束事、嬉しう御座んす。此上ハ、心と心ハ変らぬ夫婦、とハ言ふもの、女子同士、外に仕様ハ御座んせぬ。其程迄に妾の事を愛(ほ)し」がつて下さんす御前の心が真情なら、今から妾を頼連さんにとふぞ御前の取持で」「逢はせて呉れい」と言はしやんすか。夫や嘘じや。偽りじや。真実御前の本心ハ彼頼連に近寄つて、落葉丸を取返へし、父さんや母さんの敵を討たん心」ト言ふに驚く朝開野が「コレ声高し、人や聞く。匿み匿みし此身の大望。大事を知つた上からハ、不憫乍らも生けてハ措かれぬ。覚悟し遣れ」ト言ひつゝ、も隠し持つたる懐剣をひらりと抜いて振上ぐる

17  
オ



16  
ウ

又またに恐れぬ花紫はなむらが、望む処のぞむところと身を摺寄すりよせ「さア殺して」ト  
 覚期あきまの有様。「言ふにや及ぶ」ト懐剣ふりひげんを振閃ふるひかせど、弛ま  
 ぬ紫むら「さア、斬つて殺して」ト首を差延さのべ目を閉ぢて  
 聊ちやうつとも動かぬ丈夫ぢゆうぶの心魂こころたま。熟々じゆくじゆくと見て朝開野あさひのが「心底見  
 へた」ト言ひながら又またを鞘さやに収まむれば「夫おんなら妾めかけの願ねがひを  
 適あたへ情夫じやうぶに成なつて下くださんすか」ト寄添よきぞふ紫むら、朝開野あさひのハ四下  
 を見廻まはし懐中ふくちゆうより袱紗ふくしやに包つつみし「次つぎへ」一卷いっけんを  
 取出とりしつ、差寄さつて「御前おまへの心底見こころみた上うへハ此身このみの大望たいぼう成就じゆうじゆ  
 せば、其時あのときこそハ必ず夫婦かみあな、変かはらぬ証しやう拠たハ此この「一卷」ト言  
 ふを紫むら受取うけとつて、傍かたへに存たもりあふ硯箱えんばうの筆ふでを取とり上げ、彼  
 一卷いっけんに何なにやらさらく書認かきしるめ、最前さいぜん切きつたる小文吾こぶんごが指  
 の血潮ちまを塗ぬらして「是これ見て給たまべ」ト差出さしだすを朝開野あさひの取とつて  
 打眺うちながめ「犬田小文吾いぬたごぶんご梯順血判はしじゆんけつばん」其そのが妾めかけの心こころの真情まこと「夫おんや  
 御前おまへにハ犬田氏いぬたしの「季きの妹いもで御座おはします。此上このうへハ朝開野  
 さん、今宵このよの内に、頼連たのづが片時かたとき離はなさぬ落葉丸らくえつがんを、御前おまへの手  
 に入れ本望ほんぼうを」「夫おんなら彼かれに帯紐おびづな解とけて「何なにの此身このみを任まかせ  
 うぞ、靡なくと見みせて靡なかぬが、其その処ところが勤こめの手練ての手管てくだ」ト  
 ハ言いふもの、邪知じやくち深こい頼連たのづなれば滅多めつたにハ「其その処ところを騙だます  
 が女子おんなの口先くちさき。騙だまされ易やすひが恋この道みち」夫おんなら首尾くびび良よく一振ひと  
 を「命いのちに懸かけて妾めかけが屹度いっど。先まづづ夫おん差さハ朝開野あさひのさん、奥おく  
 一間ひとまで人知ひとしれず」「手立てだての相談そうだん」「夫婦かみめかけの固かため。さア御座おは座ざ  
 せ」ト手を取とつて其その俣また二人ふたりハ奥おくへ入いる。折おりしも此方このかたの物陰ものかげ



18オ

17ウ

より、様子窺ひ立出るハ朝開野が衣装担ぎ、里七と言ふひとり一人の若者。四下見廻し独言「実に浮世ハ色々で、彼御大尽の頼連様が、金に倦して大夫さんを手に入れやうと為つしやるを、嫌つて側へも寄付かず、夫れハ引替へ朝開野さんが彼美しい顔付で、持掛ける据膳を嫌つて喰はぬ頼連様。夫さへあるに今聞けば、大夫さんが朝開野さんにつぎへ」**つぎへ**「惚れたとやら何とやら。女が女と色事」とハ、吾等が国にハ無い話。どふも合点が行かぬわい」ト一人手を組み思案最中、一間の内より庭伝ひに、そつと出来る新造歌綾あや、四下見廻し里七の側へ寄添ひ、恥しげに「モシ御懐しう御座りました」ト顔を背けて差俯けバ、里七驚愕飛退ひて「何方かと思ふたら、御前ハ誰か大夫さんに遣はる、新造さん。扱ハ春気で目が眩み、色男の門違ひか。然し女が女に惚れる世の中なれば、若しひよつと御前が吾に惚れたのなら、吾ハ一生女ハ断物。此事ばかりハ了見して」ト言ハ顔熟々打見遣り「御匿みなさるハ道理乍ら、貴方ハ里見義成なり様」ト言ふを押し止め、里七ハ四下見廻し声潜め「我本名を知つたるハ」其御疑ひハ無理成らねど、妾ハ貴方と許嫁の「夫や成氏の息女と聞し四阿殿にてありつるか」ト言ふ時、四下の木蔭より現れ出づる数多の女中。各々其処へ手を支へ「妾共ハ最初より四阿様の御腰元。御姫様にハ貴方様と



19オ

18ウ

御許嫁のありしより、嫁入の日を指折つて御待ちなされた  
 甲斐も無く、貴方様に「安房を立退き御行方知れず」と  
 世の風聞。縦何処の果迄も、御跡を慕ひ参らせん」と御  
 姫様の御供して、訃我の御所を漸々と、忍出でしが女子の  
 甲斐無さ、光棍に捕へられ、花街に売られて主従が、辛ひ  
 勤めの其内も、四阿様にハ露程も、未だ御身を汚され給は  
 ず。神や仏に願事、其甲斐在つて今此処で、御逢ひなさ  
 るも尽きせぬ御縁。嗚御嬉しう御座りませう」ト言ふに、  
 里七驚きて「我跡追ふて御館を出でしハ不見。とハ言  
 ふもの、女子の心ハ然も在らん。義成安房を立退ひて、  
 斯る容姿に身を窶すも、敵の様子を探らん為。首尾良く  
 逆徒を討平らげ、我本国へ立帰らバ」つぎ18ウつぎ 其時  
 目出度く迎取らん。時節を待たれよ、四阿殿」ト言はれて  
 此方ハ打奏れ「思ひに想ふて今日此処で、御目に掛つた  
 甲斐も無く、此假本意無い御別れを」ト言ふを打聞く腰元  
 達「夫や貴方のが御尤も。御許嫁の御夫婦仲、誰に遠慮  
 が要るもので。幸ひ四下に人目も無し。此間に積もる  
 御話を」ト言ひつ、一間ハ押入れて、御簾はつたり練降し  
 「此処に居つてハ却つて御邪魔。粧を通して、なア皆様  
 さア御座んせ」ト腰元ハ皆々打連れ立つて行く。

こ、のゑとき 此方の座にハ小文吾が一人、思案の手をこま  
 ぬき「我故郷を出でしより、犬塚犬飼と言合せ、里見殿



20 オ

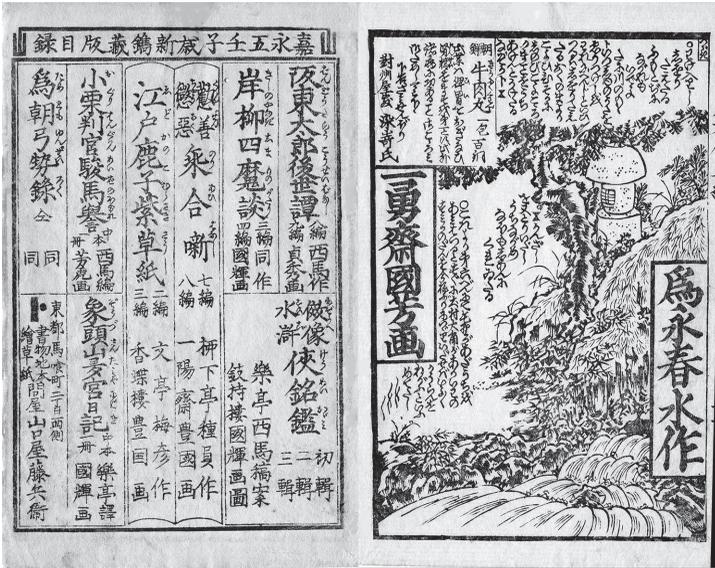
19 ウ

〔御為に山下麻呂が虚実を窺ひ、又二つにハ我輩と同因果の犬士等が在処を訊ね求めん為に、我ハ武者修行と立てて〕、些時此屋に逗留做すも、「当家の主人馬加はり大記まつた籠山頼連が、山下麻呂に一味して里見に仇做す事もやあらん」と彼等が様子を窺ふに、遊女舞子を呼集め、日毎に我を欲待す有様。何とも以て合点行かず。然るに舞子朝開野ハ女に似げなき立振舞。彼頼連を表面にハ恋慕へども、何とやら怨みを含む彼が面体。殊に落葉の一振に心を掛ける有様ハ、「兼ねて噂に聞及びし、栗飯原氏の忘形見、彼の犬坂にハ非ざるか」と思ふに、幸ひ花紫ハ阿縫が次の我姉妹。彼ハ今より三年先、並四郎なましに誘拐され行方知れずなりつるが、不思議に此程巡逢ひ、様子を聞けば彼も亦、朝開野を男と知り、心に深く慕へる由。扱て姉妹と心合はせ、恋に事寄せ試せしところ、最前我に贈りし釵児桃花花々の模様の下に

〔つき〕  
つゞき 〇分け入りし 枝折絶えたる 麓地に 流れも出でよ 谷川の 桃ト 一首の和歌を彫付けしを、我に返事と言ひつるハ「枝折絶えたる奥の間より、今宵密に忍び来よ。心の真実を打明けん」と掛けたる謎か」ト釵児を又取出だし打眺め、猶も思案に暮れ居たる。

〇此よりオ六編にて、毛野が仇討を編果つると、直に犬村大角が赤岩の住処の段を、今様振りに綴り出だせば、弥々

後表紙見返



20ウ

高覽を願ふと言ふ。目出度し〜〜〜。

鮮牛肉丸 一包 百銅

此薬ハ脾胃を補ヒ腎精を増すを才一とす。此外諸病に功あること御こゝろみ御試し可被下候

下谷さみせんばり、對州屋敷 染寄氏

一勇齋國芳画、爲永春水作

20ウ

〔広告〕

嘉永五壬子歲新鐫藏版目録

阪東太郎後世譚 八編 西馬作 貞秀画

倣像 俠名鑑 二輯 初輯 水許

岸柳四魔談 四編 國輝画

樂亭西馬稿案 欽持樓國輝画

觀善乘合嘶 八七編

柳下亭種員作 一陽齋豊國画

江戸鹿子紫草紙 三編

文亭梅彦作 香蝶樓豊國画

小栗判官駱馬管 一冊 西馬編 芳虎画

象頭山夕宮日記 一冊 樂亭譯 國輝画

爲朝弓勢録 全 同

東都馬喰町二丁目西側 繪草紙 地本問屋 山口屋藤兵衛 奥目錄

六編表紙



いまや はつげん 伝  
今様八大傳

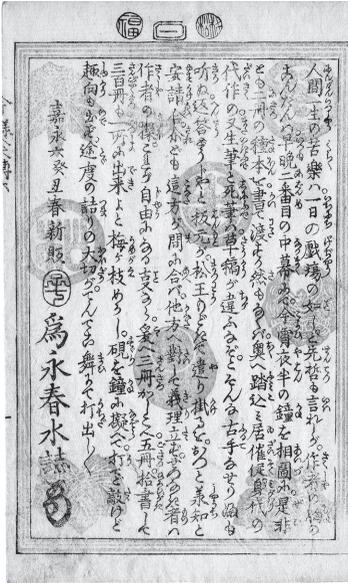
錦耕堂梓

為永春水作

一勇齋國芳画

六編上 (六編下)

表紙



〔上册見返〕

今様八犬傳／六編上冊／爲永春水作／一勇齋國芳画／高田善合梓／おとり画

〔序〕

〔村松〕〔福〕

人間一生の苦樂ハ。一日の戯場の如し。と先哲も言れしが。作者の胸のこんたんハ。早晚二番目の中幕にて。今宵夜半の鐘を相圖に。是非とも。二冊の種本を。書て渡すか然もなくバ。奥へ踏込み居催促。身代の代作の。又生華と死華ハ。草稿が違ふなぞ。とそんな古手なせりふも听ぬ。返答どうじやと板元が。松王もどきて遣り掛るを。おつと兼知と安請合。余ども這方が間に合バ。他方へ對して義理立ず。せつなき者ハ作者の操。これが自由になる夏なら。爰へ三冊かしこへ。五冊。拾書して三百冊も。一所に出来よと梅ヶ枝めかし。硯を鐘に擬へて。打てど敲けど趣向も出ず。速度の詰りの大切が。てんでこ舞にて打出し

嘉永六癸丑春新版 「子十」

爲永春水識 「印」

1+

口絵第一圖 馬加大記常武 畑上語路五郎成高

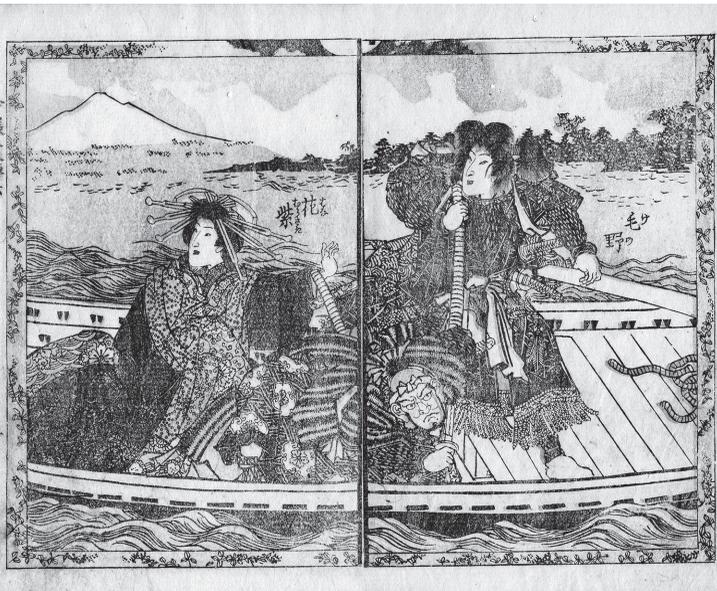


鷗尻並四郎 賊婦船中

2才

1ウ

口絵第二圖 毛野



花紫

3才

2ウ



4 才

3 ウ

五へんのつぎき 再説。犬田小文吾ハ彼小座敷に唯一人些時  
 思案の其折しも、此家の主人馬加は又大記き茶碗片手に携  
 へつゝ、徐々として出来たり「これハく犬田氏、今日た。  
 某ハ管領扇谷が定正公より火急の御召を蒙て、是より  
 鎌倉へ赴く筈。夫等の事に取紛れ、甚だ失敬。御容赦  
 ぐ。不束なる手前成れども、誘粗茶一つ參らせん」と  
 差出す茶碗に、小文吾ハ恭しく手を支へ「扱ハ俄頃に鎌倉  
 へ御出立との御心事か、御心忙しき折ならんに、態々拙者  
 へ御手づから御茶送給はる主人の御懇志。小文吾海に痛  
 み入る。夫のみならず最前より籠山氏の御待にて色々との  
 御饗応。思はず酩酊御免あれ」ト言ふに、大記ハ打笑みて  
 「夫ハ近頃 忝い。今宵ハ倅鞍弥五やこが誕生日にて候へ  
 バ、籠山に申付け、幼けれども今様の一ツ曲を催す筈、猶  
 緩々と寛ぎて又一ツ献を過されよ」ト言ふに、小文吾嬉し  
 げに「田舎育ちの某にハ何よりの御敬待。必ず拝見仕ら  
 ん。何ハ扱措き、御馳走の御茶。誘頂戴」ト言掛けて、  
 茶碗を手に取り押戴き吞まんとしつゝ、良く見れば茶碗の  
 内ハ茶にあらで、色も名にあふ山吹の花を散らせし幾枚の  
 小判に、小文吾心得兼て茶碗を其俵差置くと、大記ハ見  
 つゝ、打笑みて「犬田氏、何故に其許りなる僅かの茶を心に  
 ハ掛け給ふぞ。然らバ拙者が心底を打明けて物語らん事、  
 可惜しき事乍ら、某が主人と憑む千葉介の自胤たるハ、



5才

4ウ

そのつれづれつ おもひか 家を嗣ぐべき者ならず。拙者も原来  
 千葉の一チ族、今自胤を押し倒し、代つて取る共、誰か又当  
 り難しと言ふ者在らんや。夫に就て其許に暗に談ずる子細  
 あり。先良く是を見られよかし。此扇の絵ハ水に船あり  
 是を我身に比べ見るに **つぎへ** **つぎ** 君ハ船なり臣しんハ  
 水なり。水良く船を浮ぶれども、又良く船を転覆す。某  
 是迄、自胤を船と敬ひ浮べしかども、船鈍ければ走り得  
 ず。此俥にして朽果てん事、何とも以て残念なれば、我  
 自胤に詰腹切らせ、倅鞍弥五を取立て千葉の家を相続せ  
 しめ、管領扇ヶ谷を味方に憑み、先年安房にて討漏らさ  
 れたる山下麻呂を語らひて、彼等が為に里見を滅ぼし、又  
 成氏をも討平らげて、威を隣国に奮はんと思ふ心ハ存りな  
 がら、未だ智勇の軍師を得ず。然るに御身の武勇才覚いと  
 憑しく思ふが故に、打明け憑む拙者が心底、力を添へて  
 給はらば、事成る上ハ御身も我も共に榮華を尽すべし。此  
 事受引き給はんや」ト潜めき告るを、小文吾ハ熟々聞いて  
 威儀を改め「何事かと存ぜしに、思ひ掛け無き密事の御憑  
 み。原来、貴殿の御仰の通り「君ハ船なり。臣ハ水なり」  
 然れども、船を浮べるハ此水の順にして、又転覆すハ逆な  
 り。其順を捨て逆を探るハ、武士の為まじき処也。「君々  
 たらずとも、臣以て臣たれ」とある教も既に候はずや。  
 庶幾くハ迷惑を捨て、真実千葉家の忠臣と成られん事こ



6才

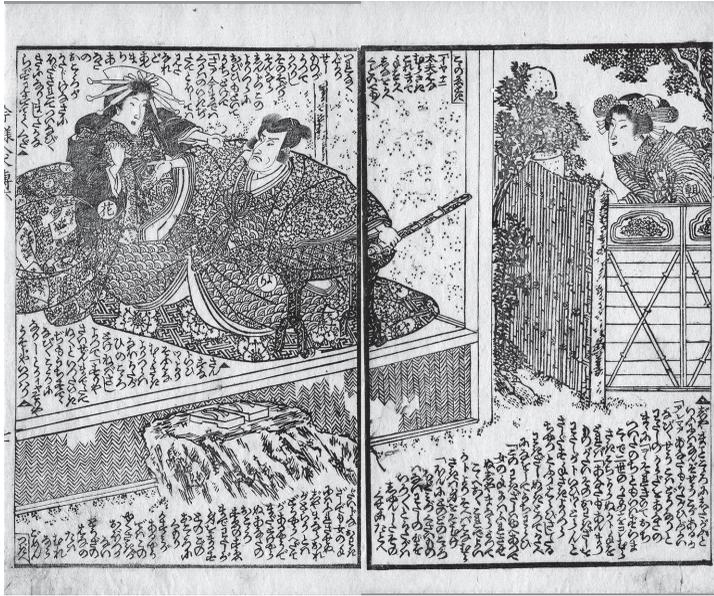
5ウ

そ有りたけれ」ト憚る色無く答へしかハ、大記八案に相違して、心の内に憤怒を含めど、然あらぬ鉢にて打笑ひ「適見上げた貴殿の心」底。今申せしハ戲言にて、御身の心を惹き見しのみ、必ず他言為給ふな。最前も言ふ如く「鎌倉へとて急ぎの旅立。帰宅の上にて御」目に掛らん猶緩々と逗留あれ」と言捨て、奥へ立つて行く。跡見送りて小文吾が一人莞尔と打笑ひ「此程よりの大記が欲待、心得難しと思ひしに、我推量に違はずして、彼ハ謀反の陰謀あり。麻呂山下を語らひて里見の家を滅さんと、我を明せし上からハ、最早遁れぬ彼等が運命。我偽計つて彼に味方し、手立の裏を搦んと思はざるにあらねども、世に大丈夫と言はれん者が、仮にも敵に与してハ人の誹謗も免れ難く、扱つてつれなく論破り、彼が言葉に従はねバ、大事を知つたる我なる故、生けて措かじと謀るなるべし。然もあらバあれ、何程の事をか做さん」と呟きつ、手を拱きて居る折しも、床に掛けたる掛物(の)背後の壁を、予てより切破りてや措きたりけん、頬被せし手拭に面を隠せし一人の癖者、手に一ト筋の槍を携へ拔足しつ、彼穴より忍入りて、小文吾が油断を見澄まし、背後より物をも言はず突掛るを、槍の光に小文吾が目早くひらりと身を躲し「此ハ癖者」ト言ふ間も無く、隙もあらせず突掛る穂先を

彼方此方遣り違はして「**三**の巻」五ウ「**三**の巻より」抜合はせたる刃の稲妻、些時もあらず、癖者の「肩先発止と斬下げて怯む処を蹴倒しつ、上し掛つて胸元を二ト太刀ぐさと刺通す弾に破りし手拭の取れしに初めて踏る、顔を熟々打眺め「コリヤ此、先年我姉妹を誘拐したる鷗尻の並四郎にハあらざるか」下言ふ時、背後の暖簾より様子窺ふ一人りの女、隠し持つたる懐剣を小文吾目掛けて早速の手裏剣。此方ハ早くも夫と見て、側辺にあり合ふ掛花生を小盾に発止と受止むれば、仕損じたりとや驚きけん。慌てふためき、彼女ハ面を見留むる暇も無く、早くも姿を隠しける。**六**オ

【**三**の巻とき】「イヤナニ太夫 花紫、此迄手を替へ品を替へ口説いてもく、薄情く斗せしものが、打つて変はりし其素振。夫なら信実此頼連に帯紐解いて打解けて」さア今迄ハ花街の意気地立通してハ見たなれど、余り貴方の御心が忝さに絆されて、つい靡く氣に成りました。必ず見捨てて下さんすな」ト言ひつ、寄添ふ花紫。頼連ハ猶疑ひの心解けねバ差寄つて「夫や最前迄、立て抜くと言た意気地も打捨て、靡く心に成りしとか。イヤ夫や嘘じや、偽りじや。誠心に従ふと言ふにハ、何ぞ証拠が在るか」アレマ貴方も疑ひ深い。靡く証拠ハ如何なりと、妾の身体を貴方の随意に「ヲ、夫聞いて着着いた。後とも言はず、今此処で二世の契約を。コレ紫 此方寄らぬか」ト

手を取れば「貴方も余り物堅い。其御脇差を妾が」ト言ひつ、取らんと差出す手先、頼連ちやつと振払い、挿したる脇差抜取つて、傍に直して打笑ひ「此脇差ハ故有つて、女の手には触れさせぬ。邪魔なら取つて此処へ置く。此で良いか」ト寄添へバ、花紫ハ身を背け「本当に殿御の心程、水臭い物ハ無い。妾の心を色々と疑はしやんした其癖に、縦大事な御脇差でも「女の手には触れさせぬ。邪魔なら俺が取らう」とハ、何やら隔てが有る様で、未だ解けやらぬ貴方の御心。末の未迄、妾が身を任す殿御の御心に、曇り霞が有る様でハ、此行末が覚束ない。当座の花の戯れなら御免」**つぎへ**」**つぎ**」なされて下さりませ」トびんと拗れば、頼連差寄り「此ハしたり。花紫、何で其方を隔てやう。夫程迄に此脇差が欲しくバ、其方に遣りもせう。然し今言ふ通り、此や是、身にも替へ難き大事の一ト腰なる故に、迂闊にハ手放されぬ。帯紐解いてしつぽりと抱かれて寝たら、其時に「夫なら、一つ寝させぬ間ハ」「ハテマ何で有らうとも、俺が言葉に任せて措きやれ。僥倖此処に鈍子杯、固めに一つ呑んでさしや。ドレ酌をしてとらせん」ト鈍子推取り、疾くく、と理無く言はれて花紫ハ、側の杯手に取上げ出せば、頼連差寄つて酒を注がんとする折しも、思掛けなき背後より「杯成らぬ」と声掛けて、奥より出づる朝開野が、二人の中へずつと立出で両手を延



7オ

6ウ

ばして杯と銚子を持ちし二人の手を確乎と捉へて押隔て  
 「ても厚かましい、紫さん。頼連さんにハ御前より妾が  
 先へ惚れて居る。夫に固めの杯とハ、思へバ良くも出来た  
 義理。頼連様も聞へませぬ。女子の口から恥かしい言の限  
 りを言はせて措いて、余りつれない御心根。せめて一ト夜  
 の御情を」ト寄るを突退け、声荒(ら)げ「又しても執拗女。  
 最前太夫を其方に預け、「口説落して身が恋を成就させよ」  
 ト言付け措きしに、太夫の心の解けたるハ其方が手柄と思  
 ひの外、却て邪魔做す不届者。誰か在る。朝開野を其  
 桜木へ縛めよ」ト言葉の下よりト部季六「畏つた」ト言ひ  
 ながら、一ト間の内より踊出で、甚も柔弱き朝開野を其俣  
 捕つて引据ゑつ、腕を背後へ捻上げて傍に在りあふ  
 釣瓶繩にてぐるぐる縛めつ、桜の幹に縛付くれバ、  
 頼連ハ見て打笑ひ「夫で良し。夫で良し。生命も取るべき  
 奴なれども、今宵ハ主人の御息たる鞍弥五殿(の)誕生  
 故、夫に免じて許して呉れる。太夫其方ハ身と一緒に奥の  
 一ト間ですつぽりと「妾や、どうでも其一腰を」「ハテサテ  
 其方も悪い見。最前も言ふ通り、帯紐解けバ直ぐに  
 と言やるなら、然らバ此なる一ト腰を、季六、其方に預け  
 て措かう。太夫が心打解けて、我思ひをバ晴しなバ、  
 其方から太夫に渡して遣りやれ」ト言ひつ、差出す脇差を、



7ウ

8オ

季六が受取つて「洵に太夫ハ僂倅者。頼連公の御心に従ひさへする時ハ、此大切な一ト腰を下さらうとの今の御言葉。まづ其迄ハ季六めが確乎と預かり奉る。然し乍ら頼連様、此朝開野ハ今様に出でねバ成らぬ大事の役目。此様に縛めてハ差当たたる手支へに「下言ふを、頼連聞取へず」ハテ其とても大事無い。朝開野が代りにハ、花紫に某が舞の手振や何や彼や、つい口移しに教へて遣る。太夫と共に季六も奥へ来やれ」下身を起こせバ「ても舌怠い」下朝開野が寄らんとするを、隔つる季六。頼連ハ見て嘲笑ひ「ハテ良い様」ト言ひ捨て「て」、太夫が手を取り季六と共に奥へぞ入りにける。後見送りて朝開野が「彼恋知らずの頼連様、憎いハ太夫。花紫。縦此身ハ縛められ、手足ハ自由に成らずとも、思込んだる女子の一チ念。彼奴おめく寝かそうか」ト縛られ乍ら身悶へして、彼方を屹度睨まへたる。斯る折しも背後より抜「び」足しつ、出来る武士。縛められし朝開野が側へ差寄り、顔打眺め「ハテ何時見てもく美しい其面差。其に就けても頼連殿、此艶やかな愛嬌で持掛ける掘藤を、喰はぬばかりか斯様に、縛つて措くとハ分らぬ心底。夫にハ引替へ身共ハ又、其方の笑窪にしみくくと惚れたとこそ言へ、足駄を履いて首ツ文。此程想ふ心中男、よもや憎うも思ふまい。頼連殿への面当に、身共に今から乗換へる心ハ無いか」ト寄添へバ、



8ウ

9オ

朝開野静かに見返りて「遂ぞ見慣れぬ御侍さん。貴方ハ  
 一体何方の」ハテ見慣れぬとハ実が無い。拙者ハ千葉の  
 家隸にて畑上語路五郎はごらうと呼ばる、者。此程よりし  
 て、馬加殿の屋敷へ度々参る毎に其方の舞の手振と言  
 ひ、又顔容姿の美しさ。一ト目見た其時より、寝ても覚め  
 ても忘れず、何時ぞハ逢ふて心の丈を言はふくと思ひ  
 しに、此処で逢ふたハ尽させぬ因縁。どうじやく」と身  
 を寄せて口説けハ、朝開野顔赤らめ「其程迄に妾の事を思  
 ふて下さる御志、頼連さんへの面当に、いつそ貴方に身を  
 任せ、此見よがしに為たけれど、夫でハ貴方の御身の上。  
 頼連さんへ済みますまい。心底妾を信実と思ふて下さる  
 御心なら、妾と一緒此御館を駈落してハ下さんせぬか。  
 然う成る時ハ貴方と二人、誰に遠慮も無い夫婦。」ト言はれ  
 てぞくく語路五郎、喜びながら打點頭「夫ハ誠か信実  
 か。其一チ言を聞く上ハ、人に語らぬ密事乍ら窃に告げ  
 ん」ト四下を見廻し「抑々、当家の執権職馬加大記と呼ば  
 る、者(の)、当初ハ卑賤き者成りしが、何時ぞや当家の老  
 臣たる粟飯原首と言ふ者を「謀反在り」と言立てて、  
 誹我へ使ひの途にして籠山頼連に申付け、彼粟飯原を  
 討取せ、誹我へ持参の尺八さへ並四郎と言ふ癖者に奪取ら  
 せて、馬加が潜在隠し措きたるなり。此より大記ハ経上り  
 て執権職と成しより、今ハ上無き活計、欲楽、我も 次へ



10 才

9 才

其時大記に与して、粟飯原が妻稻木いをはじめ、其独子の夢の助をも、首打落とせし手柄ハあれども、大記ハ我を重くも用ひず。「所詮当家に在りとても、成出づる日も在るまじ」と思ふが故に、過ぎし頃、大記が隠し措く処の嵐山と名付けたる彼尺八と諸共に、当家の重宝小笹の一ト振、盗出だして此処に在り。此を都に持参做し、室町殿へ差上ぐれば、此身の出世疑ひ無し」ト、我を忘れて、我と我悪事を語出しける。今語路五郎が問はず語に「扱ハ」と許り朝開野ハ、驚く胸を押鎮め、猶其後を聞かんとするにぞ、夫とも悟らぬ語路五郎ハ、弥々側へ寄添ひて「元来、件の尺八を大記が潜在し措くも、彼ハ謀反の兆候ありて、主人頼胤を押し倒し家を奪はん目論在る故、我其事を知る故に、先へ廻つて、尺八と小笹丸の一ト振を盗して此処に持つて居れば、今言ふ通り、此二品を室町殿へ差上げて、立身出世を做さんと思へバ、此より其方と諸共に、都を指して赴かん。早、日ハ暮れて丁度よ目目も幸ひ四下に人目も無し」

下の巻へ

春水作 國芳画 10ウ



10ウ

東都書房	馬喰町三丁目	錦耕堂藏板	狂句五百題 全三冊	五代目川柳著	贈答百人一首 全一冊	諸画家郡筆	奇持百歌仙 同斷	一立齋廣重圖案	天錄太平記 初四編	一勇齋國芳畫作	田舎織糸線袂衣 四編	同全	遊仙春雨柳紙 土編	一陽齋豊國画作
------	--------	-------	-----------	--------	------------	-------	----------	---------	-----------	---------	------------	----	-----------	---------

〔廣告〕

藏版新刊珍奇雜書略目錄  
 遊仙春雨柳紙 十二編  
 田舎織糸線袂衣 五編  
 天錄太平記 初四編  
 追々出版  
 奇持百歌仙 同斷  
 贈答百人一首 全一冊  
 狂句五百題 全三冊  
 五代目川柳著  
 錦耕堂藏板  
 東都書房 馬喰町三丁目  
 奥目錄

「今様八犬傳」(三) — 解題と翻刻 —

奥目錄

見返



11才

〔下巻見返〕

「今様八犬傳／六編下の巻／為永さく／一勇齋急がく／紅葉錦耕両梓」「おとり画」

上の巻迄 此俣に早くト言ひながら、緊縛められたる朝開野が、縄を解かんとする折しも、此方に窺ふト部季六「語路五郎殿、先待たれよ。最前よりして物陰で聞くとも知らず、旨い相談。此通りを主人大記へ注進すると云ふ処なれど、夫で八物に角が立つ。此朝開野にハ貴殿より拙者が先へ惚れて居れば、先某が一口説き口説くを其処にて見物あれ。控へ召され」ト睨付けて、此方を見返り目を細め、にこくものにて「コレ朝開野 づきへ 11才 づき」然りとてハ悪い了見。此語路五郎と言ふ男ハ、第一に酒好で、酒の上が極悪く、其上瘡かで骨絡み。斯様な男に肌触れたら、其美しい整然とした其方の鼻さへ落ちるも知れぬ。夫から見れば此季六、何処に一つ是ぞと言ふ事無、男振。其のみ成らず、語路五郎が彼尺八と小笹の太刀を自慢らしうひけらかせば、我とても又落葉丸の刀を此処に持つて居る。其方ハ何にも知るまいが、此落葉丸の一口振ハ粟飯原氏の家の重宝。先年罪を蒙りて粟飯原一ツ家滅亡せし時、愛妾調布と言へる者、此落葉丸を携帯へて、何時の間にか御館を駆落ち、其後灰に巷説を聞けば、足柄山の近辺



12オ

11ウ

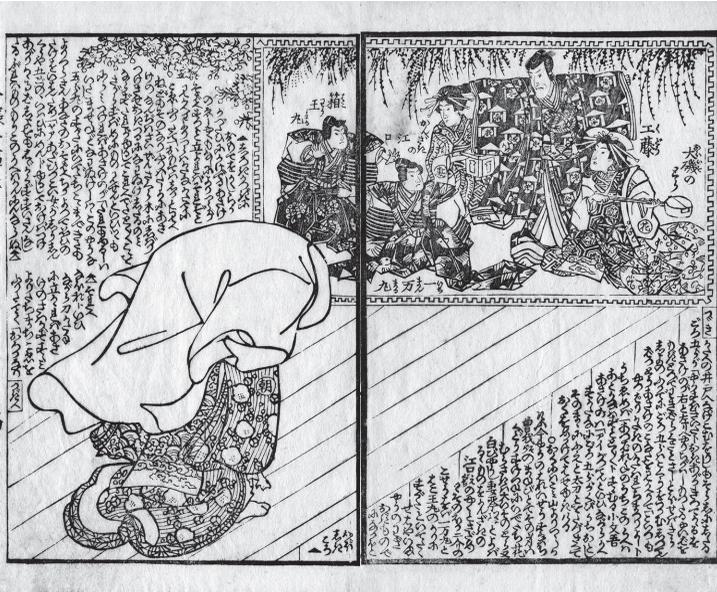
にて、首が胤を産落とし、暗に主人馬加殿を「仇敵なり」とて窺ふ由。然るに籠山頼連殿、先年首を討取りしより、些時浪人と姿を変へ、諸国を遍歴せられしに、近頃由井ゆが浜辺にて彼調布が非人と成り、特に持病の起りにや、菰を敷寝に苦しげ成る其為体を見付出し、騙寄つて刺殺し、落葉丸の一ト振を奪返して当家へ持参し、事の次第を述べしカバ、主人大記が取持にて、帰參整ひ、今にてハ往年に変はる籠山頼連。又此刀の奇特と言つば、抜け白玉散る白刃の稲妻、血を彩せば、忽地に落花くわえ落葉を做す故に、落葉丸とハ名付けしとぞ。太刀の因縁此通り。今此太刀を室町殿に差上ぐる其時ハ、立身出世ハ思ひの俛。此処ばかり日ハ照らぬものを、其方が「応」とさへ言へば、是から都へ手を取つて、連れて上つて夫婦に成る。最前其方を荒々しく此桜木へ縛めたハ、頼連殿(の)言付け故、怨みも有らふが堪忍しや。否か応か」ト差寄つて、口説くを語路五郎が押留め「此ハ如何に、季六殿。拙者が只今申したと同じ台詞で口説かれてハ、此方甚だ迷惑致す。兎にも角にも身共が先約なり。「朝開野」ト寄添へバ、「身共であらう」「イヤ拙者」ト、語路五郎と季六が互いに争ひ朝開野(の)右左りより取付いて挑むを、朝開野熱々聞果て、莞尔と笑ひ「モウ夫で良い」。笛の因縁、太刀の由来、馬加、籠山、其方達迄の謀略の段々。聞いた



13 才

12 ウ

る上ハ、早其方達に用ハ無い「つきへ」出「つき」其尺八と二人りの太刀諸共に、其方達の首を妾に渡して行きや」ト思ひ掛けなき朝開野が言葉に驚き、二人りの士「扱ハ汝ハ癖者よな。大事を聞かせし上からハ、とても生けてハ措かれぬ奴。其本名を疾く言へ。言はれずハ已一ト討ち」ト刀引抜き、語路五郎が右より掛るを朝開野が、其身ハ縛められ乍ら、肘を利して早速の当身、肋骨を突かれて語路五郎が「苦」と一ト声仰反るを、隙もあらせず季六が、共に刃を抜翳し「只一ト討ち」と振上げた。其時遅し此時敏し、思掛けなき彼方より、誰とハ知らず撃出す手裏劍。狙ひ違はず季六が、喉へ発止と撃当てられ、些時も堪らぬ此も又、共に一ト声叫びつ、其氣息ハ絶へにけり。思はぬ助けに朝開野ハ、驚きつ又喜びつ、此方を佞と見返れバ、見越の松を足代に塀を乗越へ、犬田小文吾徐々として立出てつ、今季六を討留めし彼手裏劍を抜取りて「分け入りし枝折絶へたる麓路に流れも出でよ谷川の桃」ト一ツ首の歌を彫付けて、我に与へし此鉞兒、謎の心が解けし故、枝折絶へたる奥の間より忍出でたる我出立、此季六をはじめめとして、邪魔做す奴ハ我が討取る。御身ハ早く本望を「ト言ふに、朝開野緊縛の繩を振切り、打点頭「ヲ、憑しや犬田氏。三品の宝手に入る上ハ、妾ハ奥へ紛入り、本意を遂げたる其上で互いの心打明けん。先其迄ハ小文吾



14  
オ

13  
ウ

さん」其方ハ矢張り舞子の朝開野。人目に掛らぬ其間に  
 此死骸(を)「ト季六が傍へ立寄り、落葉丸の太刀をもぎ取  
 り、亡骸を「つきへ」「つゞき」側の井戸へ投込む折しも、  
 空死したる語路五郎が「様子ハ聞いた」ト起上り斬つて掛  
 るを、朝開野が右と左りへ遣遣はし、持つたる刃を奪取つ  
 て脇腹くさと刺通せば、急所の深手に語路五郎ハ虚空を掴  
 む七頭八倒。朝開野此方を見返りて「此奴も矢張り仇敵の  
 片割血祭良し」ト打笑めバ「適手の内。此上ハ跡構は  
 ずと、疾くく」ト勸むる小文吾。朝開野ハ「アイ合点」  
 と言ひながら、返す刀に語路五郎が首級討落し、其俣に笛  
 と太刀とを携帯へて、奥を目掛けて馳行きける。

○奥にハ籠山頼連か、今日今様の晴衣装。則ち曾我がその  
 真似びとて、其身ハ工藤祐経に出立ち、花紫ハ大磯の虎、  
 又白拍子妻琴とよ呼ばる、者を神崎の江口えの役と定め  
 つ、其他二人りの小姓をバ一万丸と箱王丸の仮に姿と  
 出立(た)せ、はや今様の伶楽もの、でになかほと思しき  
 頃、白き被布に顔を隠し、廊下伝ひに駆出る朝開野、会釈  
 も無しに頼連が、傍へすつくと立寄れば、其ぞと見返る  
 頼連ハ、刀片手に声振立て「顔ハ確乎と見へねども、其  
 形振ハ儘に朝開野。汝ハ最前桜木に縛付けさせ措きつる  
 に、縄抜け為たるのみ成らず、誰が許して此処へ出た。疾  
 くく此処を下らずバ目に物見せん」と言ひつ、も、睨付け

れバ朝開野が「誰も許しハ致しませねど、繩拔しつ、此様  
 な五郎丸の姿に立出し此処迄来たも頼連さん、貴方の御側  
 へ近寄つて、思ひの丈を言はん為」ヤアあだ執拗い女が  
 執念。鞍弥五殿の「祝ひに免じ許して掛けバ、付上り、斯  
 る場所をも憚らず推參做したる無礼者。もう此上ハ堪忍な  
 らぬ。其処へなほれ」ト言ひながら、刀片手に立掛れバ、  
 朝開野驕かす進寄り、忽地声を奮立てて「愚鈍なり」つぎへ  
 1340 龍山頼連。汝大記と心を合せ、先年、杉戸とすきの  
 松原にて、粟飯原首胤度が許我へ赴く道に待受け、首を  
 討つて其場を立退き、松田由井が浜辺に於て、首が側妾  
 たつり、おびやう、悩む折を窺ひ、騙討に殺害做し、落葉丸の  
 一ト振を盗取つたる大悪人。斯く言ふ我を誰とか思ふ。  
 粟飯原首が遺胤、調布が腹に宿されて、足柄山の近辺な  
 る犬坂村いぬさか、胤智が、親の仇敵と十六年付狙ふたる馬加籠  
 山。此迄女と姿を変へ、仮に汝を慕ひしも「嵐山の尺八と  
 小笹落葉の二夕振を、首尾良く奪返せし上、本意を遂げ  
 ん」と思ひし故、然るに季六語路五郎が、我(に)悪事を  
 口走りしより、難なく三品を取返せば、朝開野と言ふ偽  
 名を、今ハ捨てたる犬坂胤智。父と母との仇敵、其と名告  
 つて勝負せよ」ト被布を取つて投除くれバ、以前に變はり  
 し身輕の立立。夫と見るより花紫も懐劍片手に差寄つて

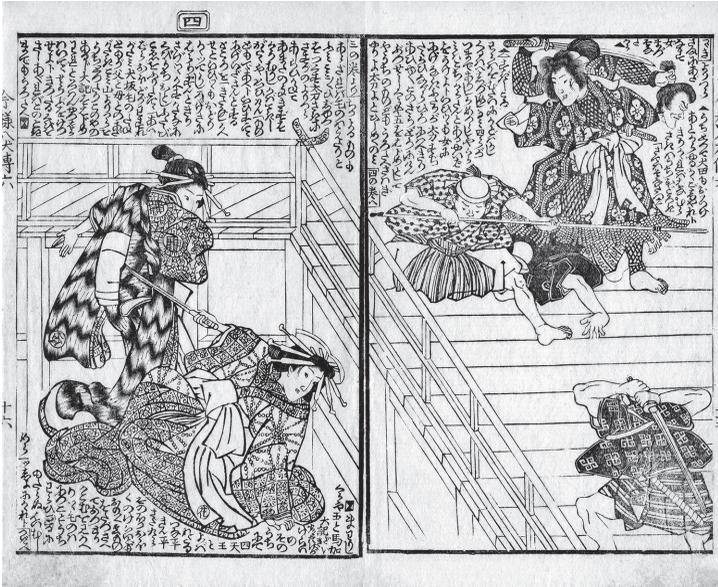
「妾も実ハ犬田が姉妹。犬坂殿と兼てより夫婦の契約を  
 為し上ハ、舅の仇敵、頼連殿、さア尋常に」ト詰掛くれバ、  
 思ひ掛けなき頼連ハ、驚き乍らも聊も騒がず「扱ハ汝二人  
 の奴ハ、首に所縁の者なりとか。如何にも首調布を殺害  
 做せしハ、斯言ふ頼連。及ばぬ事を仇敵呼ばはり。返討ち  
 だぞ。覚悟せよ」ト 刃をすらりと引抜けバ「扱こそ仇敵  
 逃さじ」ト毛野も刀を抜合せ、互ひに戦ふ一上一下。  
 花紫も諸共に、毛野を助けて頼連に斬掛らんとする処を、  
 傍に在りて最前より様子窺ふ妻琴が、隠し持つたる懐劍  
 をすらりと引抜き、押隔て「紫、太夫と呼ばれしハ、犬田  
 が姉妹(と)聞くからハ、妾が為にハ仇敵の片割、舞子の  
 妻琴ト名告りしハ、犬田を謀る謀事、実(と)ハ鷗尻の並  
 四郎が妻船虫ぞや。最前夫並四郎ハ大記さまに憑まれて  
 大事を知つたる小文吾故、刺殺さんと為たりしに、却て  
 犬田に斬伏せられ、其時妾も物陰より窺ひ寄つて撃つた  
 る手裏劍。其さへ彼に受止められ、夫ハ其場でやみく  
 最期。おのれ小文吾。夫の仇と思ふ折から其方の一チ言。  
 犬田の姉妹(と)言ふのみか」つぎへ 1415 頼連様に仇做  
 す女。先づ其方から討取つて、犬田も追ッ付け後から遣  
 る。覚悟しやれ」ト斬掛れバ花紫ハ打驚き「扱ハ其方ハ過  
 ぎし頃、妾を無体に誘拐し、花街へ沈めし並四郎が妻で  
 ありしか。珍らしや、怨みハ此方から沢山と在る。刃を



15  
オ

14  
ウ

受けよ」ト言ひつ、も女に似気なき二人が太刀筋。闘ひながら広庭へ斬り合ひ行く。此騒動に見物せし鞍弥五を始めとして、屋内の者共、狼狽へ騒ぎ「槍よ太刀よ」と犇めくのみ。四の巻へ 15ウ 三の巻より 近寄る者もあらざれば、毛野ハ「得たり」と踏込みく、秘術を尽す太刀先に、流石の頼連あしらひ兼て、数多の手傷を蒙りしかば、敵し難くや思ひけん「者共出合へ」ト言捨てて、逃出さんとする処を「卑怯し、返せ」と言ひつ、も、躍掛つて後袈裟にばらりずんと斬下げつ、返す刀に首級討ち落し、再び声を振立てて、「粟飯原首が忘形見、犬坂毛野胤智が父と母との仇敵、籠山頼連を討取つたり。此家の主人大記をはじめ、我と思はむ奴原ハ出て勝負を決せよ」ト斬つたる首級を差上ぐれば、此時迄も狼狽へ廻りし鞍弥五と馬加大記常武が家来の其内にて、四天王と呼ばれたる綱平金平貞九郎、其他多くの家来共、各々得物を携へて推取囲むを見返へりつ、毛野ハ莞尔と打笑ひ「取るにも足らぬ蠅虫奴等、一ツ諸に掛け」ト 16オ 17ウ 呼ばはりて、両手に太刀を振、閃し、近寄る敵を斬伏せ難伏せ、飛鳥の如く駆廻るに、刀八名に負ふ小笹丸。又差添へハ落葉の一下振。殊更毛野が必死を究めし日頃の手並、十倍して先に進みし鞍弥五も金平綱平貞九郎も、或ひハ肩先腰車と当るに任せし撫斬りに、死骸ハ忽地山を做し、血ハ又流れて泉



16 オ

15 ウ

と成る迄、いとも激しく戦ふ折しも、群がる敵を投退け  
 つきの、広庭よりして出来る小文吾毛野に向ひて声高く  
 突退け、当の仇敵の馬加大記ハ今方供の用意して、  
 「犬坂殿」。この仇敵の馬加大記ハ今方供の用意して、  
 鎌倉へとて旅立ちたれば、無益の戦闘ひ御無用。早く  
 此場を斬抜けて、大記が往方を追駆け給へ。邪魔做す奴ハ  
 某が、掴殺して後より行かん。早く。ト呼ばはるに  
 ぞ、毛野ハ此方を見返りて「ヲ、良い処へ犬田殿。頼連を  
 討取るからハ、今ハ馬加只一人、討漏してハ残念也。然ら  
 バ此場を斬抜けて、大記に追付きて討留めん。御身も早  
 く裏手より「ヲ、合点」ト二天士にけんハ互ひに点頭胸と胸、  
 水門の戸を押し上げて現れ出る。出る犬田小文吾刀を鞘  
 に徐々と、行かんと為たる背後より「先づ待ち給へ、犬田  
 氏」と留むる声に驚きて、彼方を急度見返れば、見越の松  
 を伝はりて、堀を乗越へ犬坂が、ひらりと此方へ降立ちて  
 「なう犬田氏、小文吾殿、今宵ハ御身の助けにて、首尾良  
 く仇敵頼連を討取るのみか、我が父が、先年奪取られたる  
 嵐山の尺八をも、小笹落葉の二振をも取返したる喜びハ、  
 何(に)響へん方も無し。此上ハ大記を討取り、父の恨みを  
 返しなバ、兼ねて里見義成公より仰せを受けし我身の  
 素性。何時ぞや夢に在々と、見しに違はず伏姫君の、御子  
 に等しき者なれば、里見の為に力を尽くし、山下麻呂を滅さ  
 ん。御身も同じ犬士にて、玉と痣との在る事を、妹御の物語

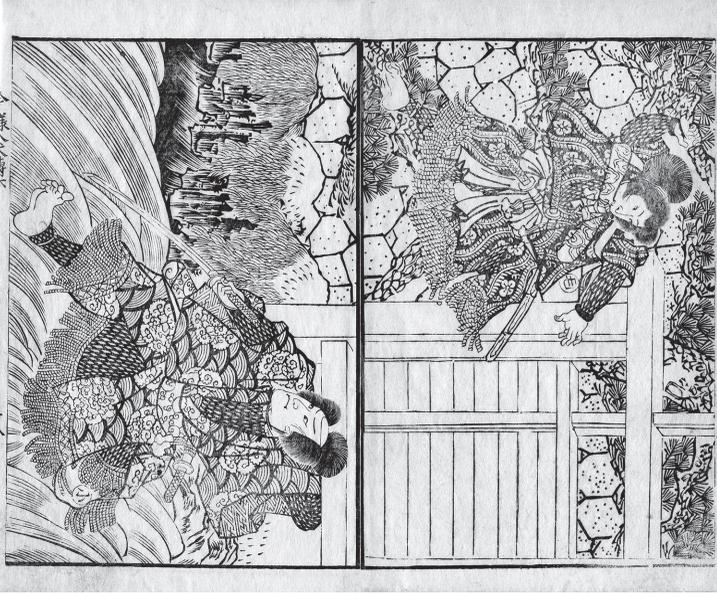


17  
オ

16  
ウ

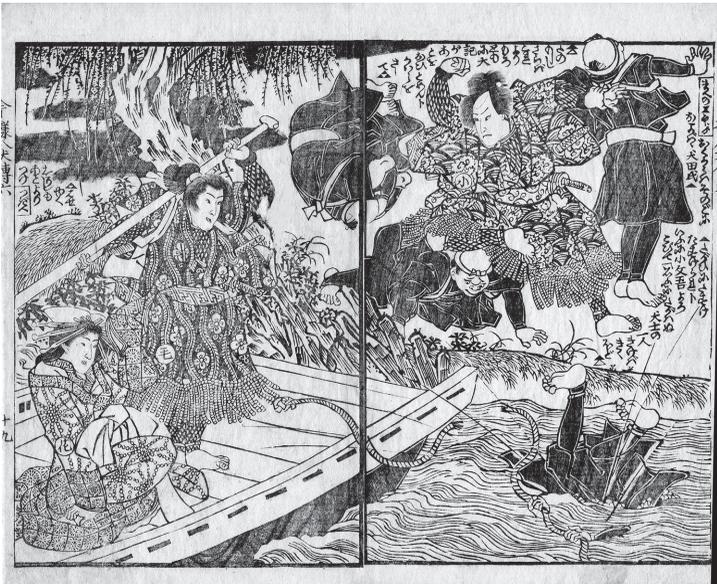
に承<sup>うけた</sup>はりしのみならず、里見<sup>りみ</sup>殿<sup>どの</sup>より渡<sup>わた</sup>れし連判<sup>れんぱん</sup>帖<sup>てい</sup>に血判<sup>けつぱん</sup>を、確<sup>たし</sup>かに受<sup>う</sup>け取り<sup>と</sup> [つぎの] ×印<sup>17ウ</sup>へ [挿<sup>17ウ</sup>絵<sup>18ウ</sup>] [まへの] ×印<sup>18ウ</sup>より措<sup>お</sup>くからハ、其<sup>その</sup>後に及<sup>およ</sup>ば[ば]犬<sup>いぬ</sup>田<sup>でん</sup>氏<sup>し</sup>、互<sup>たが</sup>ひに助<sup>すけ</sup>け助<sup>すけ</sup>けられ「ト言<sup>い</sup>ふに小<sup>こ</sup>文<sup>ぶん</sup>吾<sup>ご</sup>喜<sup>よろこ</sup>びて「思<sup>おも</sup>ふに違<sup>ちが</sup>はぬ犬<sup>いぬ</sup>士<sup>し</sup>の一人<sup>ひとり</sup>。聞<sup>き</sup>けバ聞<sup>き</sup>く程<sup>ほど</sup>憑<sup>たも</sup>し。然<sup>しか</sup>らバ此<sup>こ</sup>れより諸<sup>もろ</sup>共<sup>とも</sup>に、大<sup>おほ</sup>記<sup>き</sup>が跡<sup>あと</sup>を追<sup>お</sup>追<sup>お</sup>留<sup>り</sup>めん」ト河<sup>か</sup>原<sup>はら</sup>を指<sup>さ</sup>して馳<sup>は</sup>行<sup>ゆく</sup>く折<sup>ま</sup>しめ、後<sup>あと</sup>より付<sup>つ</sup>け [つぎ]へ [18ウ] 19ウ

「つぎ」 来る<sup>くる</sup>追<sup>お</sup>追<sup>お</sup>手<sup>て</sup>の兵<sup>へい</sup>者<sup>しや</sup>「逃<sup>に</sup>げしハ遣<sup>や</sup>らじ」ト言<sup>い</sup>ひつ、も、毛<sup>け</sup>野<sup>の</sup>小<sup>こ</sup>文<sup>ぶん</sup>吾<sup>ご</sup>を取<sup>と</sup>り囲<sup>かこ</sup>むを、二<sup>ふた</sup>人<sup>にん</sup>ハ見<sup>み</sup>つ、事<sup>こと</sup>もとせず、刀<sup>かたな</sup>も抜<sup>ぬ</sup>かず近<sup>ちか</sup>付<sup>つ</sup>けて、捕<sup>と</sup>つてハ投<sup>な</sup>げける柔<sup>なや</sup>の秘<sup>ひ</sup>術<sup>じゆつ</sup>。隙<sup>ひま</sup>を見<sup>み</sup>合<sup>あ</sup>せ犬<sup>いぬ</sup>坂<sup>さか</sup>が、側<sup>かたへ</sup>に繫<sup>か</sup>ぎし苦<sup>くる</sup>船<sup>ふね</sup>へ、身<sup>み</sup>を躍<sup>おど</sup>らせて飛<sup>と</sup>乗<sup>のり</sup>るを、猶<sup>なほ</sup>も遣<sup>や</sup>らじ」ト追<sup>お</sup>追<sup>お</sup>手<sup>て</sup>の兵<sup>へい</sup>者<sup>しや</sup>、繫<sup>か</sup>ぎし繩<sup>なわ</sup>を引<sup>ひ</sup>留<sup>とど</sup>めバ「え、面<sup>めん</sup>倒<sup>たう</sup>な」ト言<sup>い</sup>ひ乍<sup>さ</sup>ら、船<sup>ふね</sup>なる賊<sup>あせ</sup>を振<sup>ふ</sup>り上<sup>あ</sup>げて、只<sup>ただ</sup>一<sup>ひと</sup>撃<sup>う</sup>て兵<sup>へい</sup>者<sup>しや</sup>を川<sup>か</sup>へざんぶり打<sup>うち</sup>込<sup>こ</sup>めバ、弾<sup>たま</sup>みに切<sup>き</sup>る、櫓<sup>こ</sup>綱<sup>づな</sup>と、共<sup>とも</sup>に此<sup>こ</sup>方<sup>なた</sup>の苦<sup>くる</sup>撥<sup>は</sup>除<sup>ぞ</sup>けて、現<sup>いま</sup>はれ出<sup>で</sup>る花<sup>はな</sup>紫<sup>むらさ</sup>が、毛<sup>け</sup>野<sup>の</sup>と顔<sup>かほ</sup>を見<sup>み</sup>合<sup>あ</sup>せて「御<sup>お</sup>前<sup>まへ</sup>ハ我<sup>わが</sup>妻<sup>つま</sup>犬<sup>いぬ</sup>坂<sup>さか</sup>さん」「ヲ、紫<sup>むらさ</sup>か」ト言<sup>い</sup>ふ内<sup>うち</sup>に、櫓<sup>こ</sup>綱<sup>づな</sup>切<sup>き</sup>れし船<sup>ふね</sup>なれば、潮<sup>しほ</sup>に捕<sup>と</sup>られて八九間<sup>やちゅうけん</sup>、早<sup>はや</sup>川<sup>がわ</sup>中<sup>なか</sup>へと流<sup>なが</sup>れ行くを、毛<sup>け</sup>野<sup>の</sup>ハ驚<sup>おど</sup>き、舳<sup>しほ</sup>ろを押<sup>お</sup>立て「犬<sup>いぬ</sup>田<sup>でん</sup>を乗<sup>のり</sup>せんと」思<sup>おも</sup>ふにぞ、漕<sup>こ</sup>返<sup>かへ</sup>さんと焦<sup>あせ</sup>れども、名<sup>な</sup>に聞<sup>き</sup>こへたる早<sup>はや</sup>川<sup>がわ</sup>の、殊<sup>こと</sup>に出<sup>で</sup>水<sup>みづ</sup>で、水<sup>みづ</sup>高<sup>たか</sup>増<sup>ま</sup>して、流<sup>なが</sup>石<sup>いし</sup>の毛<sup>け</sup>野<sup>の</sup>も為<sup>な</sup>ん術<sup>じゆつ</sup>なく、只<sup>ただ</sup>其<sup>その</sup>船<sup>ふね</sup>を覆<sup>おほ</sup>さじと思<sup>おも</sup>ふの他<sup>ほか</sup>ハ無<sup>な</sup>かりける。其<sup>その</sup>と見<sup>み</sup>るより小<sup>こ</sup>文<sup>ぶん</sup>吾<sup>ご</sup>ハ、共<sup>とも</sup>に乘<sup>のり</sup>らんと思<sup>おも</sup>へども、追<sup>お</sup>追<sup>お</sup>手<sup>て</sup>の者<sup>もの</sup>に困<sup>こ</sup>まれて、乗<sup>のり</sup>遅<sup>おそ</sup>れしかバ苛<sup>いら</sup>だちて、組<sup>くみ</sup>付<sup>つ</sup>く敵<sup>てき</sup>を右<sup>みぎ</sup>左<sup>ひだり</sup>りに、或<sup>ある</sup>ひハ投<sup>な</sup>げけ踏<sup>ふ</sup>躑<sup>しむ</sup>る。此<sup>こ</sup>勢<sup>いきほ</sup>ひに



18  
才

17  
ウ



19  
才

18  
ウ

20  
才



19  
ウ

辟易して、皆散りぐに逃行くにぞ、早此上ハ心安し」と、岸を離れて行く船の、跡追留めんと為る折から、側に茂みし稲叢の、影より窺ふ船虫が、赤合羽がはにて姿を窺し、  
 次へ 19ウ20才 つゞき 笠に顔を隠しつ、ずつと立出で小文吾が、刀の鑢をしかと捕る。此時空ハ搔曇り、黒白も分かぬ暗闇なれば、小文吾ハ「又最前の追手ならん」と思ふにぞ、捕られし鑢を振放し、行かんとするを、船虫が、探寄りつ、懐剣を、拔手鋭く突掛くる。刃の光に身を躲し、信と睨し互ひの身構。然れども暗き闇夜なれば、物別れして小文吾ハ、河原に沿ひつ、馳行くにぞ「夫の仇敵」と船虫が、合羽も笠も打捨てて、帯引結び此も亦、綾無き道を小文吾が跡を慕ふて追行きける。  
 ○是より七編へ続く。目度度し〜

朝鮮牛肉丸 一包百銅

才一脾胃を補なひ腎精を益す妙薬なれば虚弱の人常に用ひて大に功あり相変らず御求可被下候。

下谷さみせんぼり／對劬屋敷 染喜氏

為永春水作

勇齋國芳画

20ウ

〔広告〕  
嘉永六癸丑歳新鐫藏版目錄

為永春水作



一勇齋國芳画

嘉永六	癸卯	新編	藏版	目錄
改東太郎後世譚	繪西馬作	八編	貞秀画	
岸柳四魔談	繪國輝画	三編	同作	
慈恩衆合嘶	繪種員作	七編	柳下亭	
江戸鹿子紫草紙	繪文亭梅彦作	八編	一陽齋	
今歳八犬傳	繪春水作	六編	香蝶樓	
政談國盡	繪國輝画	初編	豊田画	
	繪東都馬喰町三丁目西側			
	繪象頭山彦宮日記		樂亭	
	繪書物地本問屋山口屋藤兵衛		貞彦	

奥目錄

20ウ



阪東太郎後世譚	八編	西馬作	繪像	三輯
岸柳四魔談	四編	國輝画	水滸	四輯
慈恩衆合嘶	八編	種員作	樂亭西馬稿案	五輯
江戸鹿子紫草紙	三編	春水作	柳下亭種員作	
今歳八犬傳	六編	國芳画	一陽齋豊田画	
政談國盡	初編	國輝画	文亭梅彦作	
		繪東都馬喰町三丁目西側	香蝶樓豊田画	
		繪象頭山彦宮日記	中本	
		繪書物地本問屋山口屋藤兵衛	貞彦	